２．１．３　咸宜園

指定名称　咸宜園跡

保護・文化遺産の種類　記念物（史跡）

教育遺産の類型　私塾

指定等により保護されている面積　6,647 ㎡

（1）概要

写真 2-19　咸宜園（遠思楼・秋風庵）

儒学者廣瀬淡窓（ひろせたんそう）は，幕府領である豊後国日田の地に漢学を学ぶ私塾を創設した。成章舎，桂林園と名を変え，文化 14（1817）年，淡窓は，豆田町から南に 400ｍほど離れた堀田村に塾を移し，「咸宜園」を開いた。年齢や学歴，身分に関わらず，塾生を受け入れる「三奪法（さんだつほう）」による平等主義や塾生の毎月の学業成果を評価し序列化した「月旦評（げったんひょう）」による実力主義など独自の教育システムを設けた。明治 30（1897）年の閉塾までに 5,000 人を超える門人を輩出し，その中には出身地に帰り教育者となる者も多く，庶民教育の裾野を拡大した。

咸宜園は当初，豆田町と在郷町の隈町（くままち）を結ぶ街道（別称：豆隈大道（まめくまおおみち））の西側の敷地で開塾し（西家），通り向こうには伯父夫婦が隠宅「秋風庵（しゅうふうあん）」を構えていた。淡窓は咸宜園を開いた頃の様子を伝える「卜居（ぼっきょ）」という五言古詩を作っているが，漢詩には塾舎の様子や，小規模な圃があり，庭には菊や蘭が植えられていたことが詠まれている。

塾生の増加に伴って，文政 7（1824）年には通りを隔てた隠宅がある東側（東家）に敷地を拡げ，塾舎などを増築していった。その過程で，東側の「秋風庵」も敷地内に含まれることになった。嘉永年間（1848～54）には大小 15 棟を超える建造物が敷地内に存在していたことが古絵図や発掘調査などで明らかとなっている。東西に長い約 900 坪の敷地には，居宅のほか，講堂と寮舎が一体となった建造物が存在していた。

東西の塾は，街道を隔てて東西の敷地に分かれ，淡窓は東家・西家と区別していた。しかし，それらの性格は時期により異なるため明確ではない。東家側は，現存する秋風庵（居宅）や遠思楼（えんしろう）（書斎）のほかに，講堂や東塾（寮舎）が位置し，招隠洞（しょういんどう）・梅花塢（ばいかう）（居宅・客間・書斎）などが点在していた。塾主家が生活する敷地と塾生の学びの場や生活を行う敷地（キャンパス）は植栽で明確に画され，東家側全敷地の３分の１を占めていた。

西家側では，開塾当初に建設された考槃楼（こうはんろう）と西塾に加え，弘化４（1847）年頃に南塾・南楼と呼称される２階建ての塾舎が新設された。この南塾・南楼は現存しないが，後の古絵図でみる限りは園内で唯一，おそらく敷地の制約から南北方向に棟を置く建造物であった。塾主家の東家と異なり，西家は塾主の後継や都講の役職にある人物の居宅として使用されている。西家の塾舎，西塾には，他の塾生とは区別されて都講や主簿（会計）などが居住した。

図 2-3　咸宜園の指定範囲と主な構成要素

(2)　主たる構成要素　　※P44 表 2-3 参照

ア　当初建造物

①　秋風庵（しゅうふうあん）

東家（東側敷地）の南西隅に位置し，北面して建つ。天明元（1781）年に淡窓の伯父である秋風庵月化（げつか）（廣瀬家第４世 廣瀬平八）の隠宅として建てられたもので，後に淡窓・林外等歴代塾主の居宅として利用された。史跡咸宜園跡において，咸宜園開塾以前から現在に至るまで残る唯一の建造物である。建築当初は数寄屋風であったものが，天明８（1788）年の改造で大きな寄棟造の上級農家風の現在の姿に変わった。咸宜園に使われたのは，この姿になってからである。

写真 2-20　秋風庵

東西に棟をもつ桁行８間半，梁間４間の主屋の東半部を土間，西半部を居室とする。建造物の中央部と土間の南半部に２階がある。「次の間」西面縁側の北端西側に「上便所」が付属し，南勝手口外側の土庇（どひさし）に軒を接して「風呂・便所棟」が建つ。天明元（1781）年の建設部分は化粧軒・せがい軒をもつが，天明８（1788）年に増築した土間部分は茅葺屋根の葺き下降しである。

②　遠思楼（えんしろう）

秋風庵から北東に，講堂（推定地）から南東に位置し，南面して建つ。２階建，寄棟造で嘉永２（1849）年に淡窓の書斎として建てられ，淡窓と塾生らが語らう夜話や詩会の場としても利用された。明治７（1874）年に移築された後，昭和 28（1953）年に史跡内の旧位置に戻された。

写真 2-21　遠思楼

平成５（1993）年度から平成12（2000）年度にかけて行われた咸宜園の建造物保存修理工事により，遠思楼の構造の変遷が大きく４期に区分できることが判明した。第１期である嘉永２年の建築当初は，１階と２階は出入口が完全に分離していた。１階は物置的な空間で，土間と板床部分に分かれる。北西隅の２畳大の板の間は戸締まりができて棚があり，書庫のような用途ではないかと考えられる。２階は，トコ・棚を造らず円窓１つのみという簡雅な書斎である。

第２期以降は，安政３（1856）年 11 月１日の廣瀬淡窓没後以降のことと考えられ，旧２階入口からも１階３畳間へ入れるようにした。１階は居室的な性格に変わったようであり，２階押入の小改造もこの頃と思われ，複数の人が同時に使える間取りになり，

淡窓専用の書斎という性格が失われた。第３期は，明治７(1874)年に中城町(日田市)に遠思楼が売却，移築された時のもので，書院の趣が付加されて，内外とも大きく変化した。第４期は，昭和 28(1953)年に史跡地内への再移築であるが，整備は一切行われなかった。

平成８(1996)年度から行われた遠思桜保存修理工事では，淡窓の書斎として建てられた第１期の当初の姿に修復した。

③ 風呂・便所棟

秋風庵の南勝手口外側の土庇に軒を接して，北面して建つ。建造物の内外共に戦後の改造が大きく，近年の建造物と見られていたが，平成５(1993)年度に咸宜園の保存修理工事で解体作業中に柱の古材２本の残存が確認され，また秋風庵の保存修理工事に伴う発掘調査によって旧便壺・旧礎石が発見されたことから，咸宜園時代の遺構であることが判明した。

発掘調査の成果と，戦前期の古写真に加え，市内豆田地区に残る「廣瀬家隠宅便所」を参考にして，建築当初の姿に修復した。

④ 書蔵庫

東家の北東隅に位置し，西面して建つ。明治 23(1890)年 12 月，咸宜園が衰退し蔵書の散逸や消失をしないようにとの思いを込め有志一同が資金を調達して建設した。当初は秋風庵東側の梅花塢跡に建てられたが，その後幾度か史跡地内で曳家が行われ，平成 19(2007)年度～平成 21(2009)年度まで行われた書蔵庫保存修理工事により，現在地に曳家した。

写真 2-22　書蔵庫

⑤ 井戸

西家(西側敷地)の北西隅に位置する。淡窓が秋風庵西側に塾を構えた約２年後の文政２(1819)年に掘られたが，翌文政３(1820)年の梅雨期に石積みが崩落し，再度掘削して同年 11 月に使用できるようになった。井戸に隣接して咸宜園の釜屋(炊屋)と風呂があったことが，大正時代に描かれた「咸宜園絵図」(長岡永邨画，公益財団法人廣瀬資料館蔵)で確認できる。

イ　復元建造物（平成 22 (2010) 年復元）

① 井戸屋形

秋風庵の南に近接して設置された。板石４枚を組み合わせた井戸側の周囲に，川原玉石を半割りして敷き詰めた石敷きを設け，東側に同工法で築いた洗い場と排水溝を附す。井戸屋形は，東西井戸側石の側面に穿った穴に木栓をさして柱を固定し，同じ

く上面に掘った各２ヵ所の太柄穴で柱を支える方杖の土台を固定する。屋根は垂木がなく，棟木と出桁に半割竹を架け渡した竹屋根である。保存修理工事にあたっては，別形式に変わっていた既存建造物を撤去し，井戸側石の痕跡と日田市内に現存する類例調査の成果によって復元した。

ウ　地下遺構

①　東塾跡

文政７(1824)年に完成した主に塾生の寄宿舎として使用された建造物で，東家の西よりに位置し，南面に建っていたと推定される。明治 23(1890)年に書蔵庫建設では東塾の売却益が用いられたことから，同時期に売却されたと考えられる。発掘調査の第 10 次調査で確認された，長方形の内部が灰土で満たされた竪穴遺構が，東塾建造物建築のための土壌改良の痕跡と考えられ，「咸宜園絵図」においても桁行４間，梁間２間の茅葺２階建ての建造物として描かれており，その規模と竪穴遺構の規模が一致する。発掘調査では礎石等は見つかっていないため，礎石位置については推定である。一方で，西家側に建っていたとされる「南塾」は，「東塾」と同機能を有した寄宿舎であったと考えられ，南塾は桁行６間半，梁間２間の規模で描かれており，淡窓の日記には，１階が 17 畳，２階が 18 畳の規模と記している。東塾の規模はこの南塾の構造などから推定した。現在は地下遺構を保護しつつ，地表にて間取りが理解できる平面表示を行っている。

②　梅花塢（ばいかう）跡・招隠洞（しょういんどう）跡

秋風庵の東側，遠思楼の南側に位置し，西面して建っていたと推定される。梅花塢は天保元(1830)年に淡窓の書斎として，招隠洞は天保３(1832)年に淡窓夫妻の居宅として建てられた。天保 10(1839)年，梅花塢を曳家して招隠洞と接続した。その後も居宅や客間，書斎として利用された。

明治 23(1890)年に建設された書蔵庫を書蔵庫保存修理工事により曳家した跡から，梅花塢と見られる遺構が確認され，また古写真に見える書蔵庫の当初位置が梅花塢・招隠洞が存在した位置と近接していることから，明治 23(1890)年の書蔵庫建築時までには梅花塢・招隠洞も東塾と同様に破却ないし売却されたと考えられる。

梅花塢は２畳２間の小さな書斎で，招隠洞は，２畳・３畳・６畳(客間：心遠処（しんえんしょ）)の３つの部屋と西側に土間があることが文献史料から確認できる。発掘調査では，招隠洞跡は建造物の東側の礎石は確認されたが，西側礎石は後世の撹乱等で確認できなかった。その後，書蔵庫修理に伴い，礎石下から梅花塢遺構の一部と考えられる痕跡が確認された。梅花塢と招隠洞は別に建てられ，梅花塢を曳家して招隠洞の北東部分と合わせたことから，梅花塢の位置が招隠洞の西側部分の位置を確定する根拠となる。同じく，招隠洞西側の土間の大きさについて，平成 25(2013)年度の遺構表示整備に伴う調査で書蔵庫礎石を取り除いたところ，新たに礎石跡とみられる栗石が確認され，これを梅花塢の北東部分の礎石と推定すると，招隠洞の桁行が５間程度であったと想

定できる。現在は地下遺構を保護しつつ，地表にて間取りが理解できる平面表示を行っている。

２．１．４　豆田町

指定名称　日田市豆田町伝統的建造物群保存地区

保護・文化遺産の種類　重要伝統的建造物群保存地区

教育遺産の類型　その他（学園都市として塾の運営及び塾生の生活を支援した商家町）

指定等により保護されている面積　約 10.7 ヘクタール

（1）概要

豆田町は，慶長６(1601)年に，代官小川光氏が花月川北岸の月隈山に丸山城を築き，同南岸に町人地として丸山町が築かれたことに始まる。

元和２(1616)年，日田藩主石川忠総が入部し，丸山城を永山城と改め，元和４(1618)年には町人地を西側に拡大した。寛永16(1639)年には幕府の直轄地となり代官所(日田御役所)が設置され，永山町は豆田町と改名された。

写真 2-23　豆田町の伝統的建造物群

明和４(1767)年には日田代官は西国筋郡代へと昇格し，日田は九州における幕府支配の政治的な中心地となる。豆田町の豪商は九州諸大名の御用達となり，特に廣瀬家や草野家，千原家などは掛屋として活躍し，いわゆる日田金によって富を築き，町の発展に貢献した。

天和２(1682)年の最古の豆田町絵図では，町の規模について，「上町下町南北長百六十六間」「横町東西長五十九間」と記されている。町の成立当初は東から西へと緩やかに傾斜する地形的特徴により東側の上町から先に成立し，後に町人地を西側に拡大し，南北２本の通りと東西５本の通りによって整然とした町割が行われ，東側の南北通り沿いの町を上町，西側のそれを下町と称していた。細分化された宅地を描く18世紀以降の絵図と異なり，天和の絵図では同規模の宅地が整然と並び，当初の町割が明瞭に確認できる。

また，これらの町の東西には武家地や寺社地が展開し，町の北東側から近世初期以前に築かれた用水路である城内川が南西方向へ流れ，町内には城内川から取水する三本の用水路が東西に順次通された。この水路は，敷地境を通る生活用水として機能したと思われる。一方18世紀初頭頃，新たに開削した町の中央を横切る水路だけは例外的に横町の通りに面して引かれ，正徳年間の豆田町絵図では要所に火事桶が置かれていることから，この水路は密集する木造建築の防火機能を兼ねていたことが想定される。しかし，明和９(1772)年に起きた豆田町の大火で建造物の大半が焼失したことから，それまでの茅葺の町家から，豪商の主屋を中心に塗籠造の一形式とされる「居蔵造」への建替えが徐々に進み，敷地後方に土蔵を建てることも多くなった。

近世期の居蔵造の多くの町家は平入であったが，明治期の居蔵造は長屋形式のもの

を除いて一般的には妻入となり，正面に洋風の意匠を取り入れるなど，新たな景観が形成されていった。

近世城下町築造時の町域およびその後に拡張した町域を含め，豆田町には現在も整然とした町割が残る。旧町人地は短冊形の敷地形状を，また近世から近代の真壁造（しんかべづくり）の家屋が残る浦町にはほぼ方の敷地形状を留め，対照的な地割が確認できる。上町の中央部に位置する長福寺本堂は近世前期の建築，下町南部に残る居蔵造の町家も近世期である。これに対し，下町北部には明治期の居蔵造の町家が建ち，田町には大正期以降の真壁造の町家が多く建つ。

敷地は，奥行はほぼ一定しているが，間口は大小さまざまである。特に旧掛屋が所有した敷地は現在も広い間口が残る。敷地内は主として主屋を道路に接して建て，背後に庭をとり，背割に近接して土蔵を建てる。町家の主屋は主として居蔵造の切妻造平入や入母屋造妻入の２階建てとし，長屋形式とする商家もある。現在は174件の伝統的建造物が特定されている。

伝統的建造物には，廣瀬淡窓の生家である廣瀬家（史跡「廣瀬淡窓旧宅及び墓」）や多くの門人を輩出した草野家（重要文化財「草野家住宅」）と旧千原家，開塾初期の経営に貢献した旧手島家のほか，淡窓が初めての塾を開いた長福寺（重要文化財「長福寺本堂」）や寺子屋「三遷堂（さんせんどう）」などが含まれる。また，豆田町には塾生の生活を支えた支援者の旧宅跡や淡窓と塾生が過ごした空間など，咸宜園と共に歴史を刻んできた「学園都市」としての環境が良好に保存されている。

これらの歴史的な町並みは，平成 16（2004）年 12 月に重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた。

図 2-4　咸宜園と豆田町の位置図

(2)　主たる構成要素　　※P46 表 2-4 参照

平成 16 (2004) 年 12 月，豆田町は商家町として重要伝統的建造物群保存地区に選定された。教育遺産「咸宜園」と関連し，重要伝統的建造物群保存地区内に存在する主だった構成要素は以下の通りである。

ア　当初建造物

①　長福寺本堂

廣瀬淡窓が初めて塾を開いたのは，平野町に位置する長福寺であり，咸宜園創設後も塾生がこの寺の学寮に寄宿した。西，南，東の三方を街区で区切り，北を町人地に接して東西に細長い境内地を構える。境内地は上町通りに面して山門を構え，本堂は境内中央西寄りに西に面して建つ。

写真 2-24　長福寺本堂

本堂は，寺に伝わる記録や部材墨書等から寛文 9 (1669) 年造営と確認できる。

外陣天井高・内法高も低く，住宅風の空間構成をよく伝え，質素ながらも装飾を伴い，風格も備えている。17 世紀に建立年代が遡る浄土真宗本堂は，九州には数えるばかりで，改造が大きいとはいえ，外陣の住宅風構成に古式を伝え，貴重な建築例として重要文化財に指定されている。大分県では宇佐市にある別院に次ぐ規模を誇り，九州最古の真宗寺院建築である。

②　廣瀬淡窓旧宅

旧魚町通りの北側と南側に分かれており，北側を北家，南側を南家と呼ぶ。北家は魚町通りに南面して屋敷を構え，通りに面して主屋が建つ。主屋西側には潜り戸が，東側には大門が設けられている。6 畳間以外は防火性に富む居蔵造で，主屋玄関に土戸を建て込むなど通りに面しては壁の広い意匠である。南家は魚町通りに北面して屋敷を構え，通りに面して南主屋と 6 号蔵が建つ。敷地奥の西側に 7 号蔵，東側に隠宅が建つ。廣瀬家では第 4 世平八の頃から金融業に転じ掛屋を勤め，家業は淡窓の弟，久兵衛が継ぎ，大名御用達・代官所御用達の「掛屋」(商家) として商いを行い，淡窓を支えた。また，咸宜園創設者である廣瀬淡窓の生家であり，子弟も咸宜園に入門している。「廣瀬先賢文庫」には月旦評や咸宜園入門簿といった膨大な「咸宜園関係資料」が保存され，平成 30 (2018) 年に『廣瀬先賢文庫家宝書詳細目録』が刊行され

写真 2-25　廣瀬淡窓旧宅

た。また，「廣瀬淡窓旧宅及び墓」として史跡に指定されている（平成 25(2013)年３月 27 日追加指定・名称変更)。

③ 草野家住宅

草野家は，製蝋業等の商売を手掛け近郷の庄屋を勤め，掛屋としても発展してきた。草野家は廣瀬淡窓と交流が深く，草野家の家憲（仏教篤信と親孝行）を書したものが現存する。また，本家・分家ともに多くの家人が咸宜園に入門している。旧三丁目の西側に東面して住居５棟・蔵４棟が建つ。表に店・帳場を構え，南側に大戸出入口から店土間，内緒方土間の通り土間が付く。

写真 2-26　草野家住宅

店舗や仏間，座敷などからなる主屋は，近世後期から末期にかけて建築され，主屋の後方には土蔵が建ち並んでいる。主屋の表側は外部を漆喰塗大壁とし重厚な外観を呈しているが，裏側の座敷や仏間などは数寄屋風の意匠を基調としており，瀟洒な座敷飾や細部装飾を備えている。平成 21（2009）年に主屋１棟・蔵３棟及び庭園が重要文化財に指定された。

④ 旧千原家住宅

千原家は，近世期から近代期にかけ酒造業を営み，近世期には掛屋を勤めていた。家人には咸宜園の門下生で書家として知られた千原夕田がおり，また，長三洲など咸宜園で学ぶ塾生に寝泊まりの場を提供していた。

旧室町の西側に東面して主屋を建て，川端町南側，風呂屋町北側，一丁目東側まで広がる広大な屋敷を構える。近世期に建設された川端町の酒蔵を残しつつ，明治初期から建設された住居とともに，伝統的酒造業を営む屋敷構えの全体が窺える近代の建築遺構である。

写真 2-27　旧千原家住宅

⑤ 旧手島家住宅

淡窓が桂林園を建設する時に土地を提供したのが手島家である。咸宜園の前身である私塾「桂林園」の創設にあたり，土地の提供に加え，建設費用の半分を用意した。

旧平野町西側に東面して主屋を構え，背面に別棟座敷を建てる。近世期に掛屋を勤めた手島家の本家屋敷。元治元(1864)年絵図には手島儀七の屋敷地とされるが，正徳４(1714)年絵図には油職を営む清右衛門の屋敷とある。

⑥ 三遷堂（さんせんどう）

旧平野町長福寺の東側の裏町，南北に通る通りの東側に南面して建つ寺子屋跡である。南側に城内川から引かれた水路が通り，主屋の東側に水を引き込んで池庭を設け，周囲は北側に残る黒塗の板塀を巡らし，西側に門を構えていた。主屋は水路から後退して建てられる。茅葺であった屋根は，昭和 39(1964)年に瓦葺に改めた。咸宜園創立以前（18 世紀後期に遡る）に建築された可能性が高く，寺子屋に供された十畳敷の座敷が残る。豆田町の教育を支え，寺子屋を開いていた有浦琴虹・左内母子が居住した建造物である。左内は咸宜園門下生であった。

写真 2-28　旧手島家住宅

写真 2-29　三遷堂

イ　復元建造物

豆田町において，主だった構成要素の中に復元建造物は含まれていない。

ウ　地下遺構

①　長福寺学寮跡

鐘楼北の上町通りに面している。学寮は，宝暦 9 (1759) 年に修行僧の研学の場として建設され，文化 2 (1805) 年に廣瀬淡窓がその場を借り，「長福寺学寮」として最初に講義を行った。大正 12(1923) 年に廃されて，昭和 18(1943) 年にその跡地に木造 2 階建ての豆田愛児園が開園した。旧園舎の改修に伴う発掘調査を実施したところ，礎石等，学寮時代の遺構が発見された。

図 2-5　豆田町の選定範囲と主な構成要素